ISSN 0385-1087

白山哲学

長島　隆教授退職記念号

第　51　号

未了・未決の人
——長島隆先生に贈る言葉　河本　英夫（1）

略歴・業績一覧　長島　隆（5）

フィヒテとシェリング
—「知的直観」と絶対知　長島　隆（17）

北欧北方の霊性とシャーマニズム　中里　巧（43）

空の岩　山の岩　水の岩——感触の現象学　河本　英夫（65）

整形疾患という問い
—ある理学療法士の臨床から　稲垣　諭（85）

形相の庇護者
—ユリウス・カエサル・スカリゲルと知性の問題　坂本　邦暢（105）

東洋大学文学部紀要第70集
哲学科編

東洋大学

白山哲学　第五十一号　東洋大学文学部紀要第七〇集哲学科編　二〇一七年

ISSN 0385-1087

(Bulleton of the Toyo University-No.70)

HAKUSAN-TETSUGAKU

51

(Department of philosophy, Faculty of Literature)

March —— 2017

Contents

Fichte und Schelling. Ueber die “intellektuelle Anschauung” und das absolute Wissen
…… Takashi NAGASHIMA (17)

The Spirituality and Shamanism in Northern Europe and Northern Area
…… Satoshi NAKAZATO (43)

Air-Stone Mountain-Stone Water-Stone——Phenomenology of Feelings
…… Hideo KAWAMOTO (65)

Orthopedic disorders as inquiry based on the clinical experience of a physical therapist
…… Satoshi INAGAKI (85)

The Patron of Form: Julius Caesar Scaliger on Intellectt
…… Kuni SAKAMOTO (105)

Published by
Toyo University
Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo

長島　　隆　教授

未了・未決の人――長島隆先生に贈る言葉

河本英夫

私が長島隆先生に最初にお会いしたのは、1989年3月のことだった。同年4月1日より私は長崎大学に赴任することになっていて、引っ越しの作業以外に、多くの人と打ち合わせを行い、仕事の段取りを付けていかなければならない時期で、毎日のように人と会うということを繰り返していた。当時長島先生は、シェリングを中心とした「自然哲学」研究の新進気鋭の研究者の一人であった。長島先生は、日本医大の哲学担当の専任講師に前年着任されており、多くの企画をもっておられるようであった。私は当時ゲーテの自然学を手掛けており、またドイツ系の科学論をやっていた関係で、英米系の科学史や科学哲学よりも、むしろ「ドイツ自然哲学」により親和性があった。

そのときどういう話をしたのかはほとんど覚えておらず、ドイツ自然哲学の何かの著作の分担翻訳と、論集のなかの一つの原稿の話が、長島先生より出たと思う。この分担翻訳は、私の事情で手が回らず、企画そのものが中途で終了したと記憶している。当時私は、マトゥラーナ、ヴァレラの「オートポイエーシス」の翻訳を引き受けていたので、どうやって時間をやりくりするかをいつも考えていなければならなかった。長崎大学は国立大学であり、国立大学に赴任すれば、時間だけはたくさんあるということはわかっていた。もともと長崎大学は、高等商科（現経済学部）と医科大学（現医学部）を中心としてできた大学で、私の赴任した教養部は大学の教養教育の理念に沿って設定されていた教養課程を担当する部署である。

教養教育は、戦後の書物や文化的教養（映画、演劇等）に触れる機会の少ない時代に、高等専門教育とは別の教養

教育を行うという理念で運営されていた。ただし時代の変化に合わせて、もはや教養課程は役割を終えつつあると考えられており、大学の「大綱化」にそって教養部の改組が全国の大学で試みられていた。大綱化とは、大学の規制の撤廃とでも呼ぶべきもので、卒業までに各学生は１２４単位を履修すればよく、１２４単位の内実は各大学各学部の特性がでるように決めてよいという、戦後の大学行政のなかでは、最大の変更であった。

その後、私は東洋大学に１９９１年に移り、当初は文学部教養課程人文分野に所属していた。東洋大学でも教養改革が行われて、人文分野は廃止となり、そこにいた人たちは文学部の哲学科、史学科、日本文学科に分かれて移って行った。その後哲学科の量義治先生（カント哲学）の後任採用人事を公募で行い、長島先生を東洋大学哲学科にお迎えすることになった。２００１年度のことである。公募の応募者は、1名の募集に対して49名あり、何度かの会議を経て長島先生に決定した。資格審査会、教授会の審査報告は、私が行った。

こうして私は、長島先生と同僚になることになったのだが、当時私は多くの仕事を抱えて、無茶苦茶に忙しかった。自分の仕事の合間に授業をやり、学務をこなすというような感じで、「ついでに大学教員」をやっているというのが実情に近かった。そのため長島先生とはゆっくり話しているような時間を取ることはほとんど難しい状況だった。また古典の研究を、じっくり時間をかけながら行うような状況でもなかった。だから当時長島先生が、どういう仕事をしているのか、またどういうプロジェクトを展開しているのかほとんど分からなかった。

二度ほど長島先生とは、大学の入試問題を一緒に作ったことがある。夏休みの後半に、甫水会館4階の1室を使って缶詰め状態で問題作成を行ったのである。この作業では、いずれにしろ長時間一緒に仕事をすることになる。また合間に、いろいろな話が出た。大学入試問題だから、文章は実務的に書けばよいのだが、長島先生の場合、入試問題であっても普通の文章にはならなかった。東北訛りの残るような日本語なのである。しかも文章の力点がどこにある

のか、しばしば不明だった。

こんな調子だったから、おそらく授業の話し言葉も、決して聞きやすいものではなかったと思われる。味も臭いもあったと思うが、はったりをかませてわかった気にさせるような授業ではなかったと思う。

力点が分かりにくいだけではない。話を聞いていると、いつ話が始まったのか、またいつ終わったのかもよく分からなかった。不思議な話し方だった。途中で話が終わったのかと思っていると、まだ終わっておらず、再度、続きから再開されるのだが、そのときには中断前の終わりが何だったのかも忘れてしまっていた。そんなふうに話が再開されることがよくあった。再開されたとき、あの話はまだ終わっていなかったのだと思い返すのである。不思議な持続感だった。

院生の指導については、長島先生とよく話をした。ドイツで博士論文を書き上げた畑一成君が修士課程にいた頃、ゲルノ・ベーメの論文を一緒に読んであげてほしいと私は長島先生にお願いした。ゲーテの色彩論を論じるさいには、なにがなんでも読んでおかなければならない論文だった。私はこの論文の私家版の翻訳を自分で作って持っていたのだけれど、それを丸ごと畑君に渡したのでは、訓練にならない。どうしてもドイツ語を量として読み込むことが必要だった。長島先生は、根気よく畑君を指導してくれた。研究というのは、私家版の翻訳をどれだけもっているかが後の展開を決めるというのが、長島先生と私の共通了解だった。

長島先生のもっとも主要な仕事は何かということになると、ここにも不思議な未了感がある。長島先生からは多くの企画の話はでるのだが、どれが終わり、どれが中途で継続し、どれがこれから開始するのかは、ほとんどよくわからなかった。まだ継続しているのかもしれないし、すでに未決のまま中断しているのかもしれないし、また企画そのものがリセットされているのかもしれない。本人の話からは、どうなっているのかがわからなかった。物事を宙吊り

にしているのかと思うと、そうでもなかった。

おそらく決定的に重要なことと、そうでもないことの間に明確な区別を立てないでいたか、その区別を行うことを留保していたのではないかと、私は長島先生に感じている。テキストの読みでも、過度に現代に引き付けて読むことを留保し、また同時代の関連する文献を網羅的に読み続けるというのでもなかった。ただしどのようにすれば壁に当たってしまうのかについては、敏感な感度を持ち合わせていた。

ヨーロッパ思想や哲学の研究で、同時代の文献を網羅的に読むということは、文献と語学的なハンディキャップから、日本で行うことは相当に難しい。難しいことはわかっているのだが、だからと言って放り出すということでもない。また言語を超えた普遍的論理で押し切るというのでもなかった。こうした何重かの留保の隙間の弾力というような資質が、長島先生にはあった。

長島先生は、比較的身体は弱い方ではなかったのではないかと思う。冬場は、よく風邪になり、扁桃腺が張れて寝込んでいるというような様子があった。２０１６年には、口元に感染症であるヘルペスが発生した。その跡がまだ少々残っている。免疫力が落ちやすいようである。それでも新しく目覚めた研究のアイディアを話してくれていた。いくつになっても文献を読み続けるようなところがあった。その点は若い頃からほとんど変わっていなかった。

おそらくそれはいつ終わるというような企画ではないのだと思われる。際限なく文献を読み、そこでのネットワークのなかで自分の経験を動かしていく。それが長島先生の研究の姿勢である。そんなふうな取り組みだったと思う。そうなるとこれは大学教員としての定年ぐらいでは、途切れるようなものでもない。体力を維持し、感染症にも負けず、時々は雑菌を除去するにも役立つのだから、自分の部屋の掃除も行って、そして終わりのないような未了・未決の研究を続けていただきたいと切に願うばかりである。

（２０１６年10月）

長島　隆教授　略歴・業績一覧

I. 略　歴

1970年　福島県立福島高等学校卒業
1971年　東北大学文学部入学
1975年　東北大学文学部哲学科哲学専攻卒業
1977年　早稲田大学大学院文学研究科博士課程前期（哲学専攻）入学
1981年　早稲田大学大学院文学研究科博士課程前期（哲学専攻）修了
1981年　早稲田大学大学院文学研究科博士課程後期（哲学専攻）入学
1987年　早稲田大学大学院文学研究科博士課程後期（哲学専攻）満期退学
1988年　日本医科大学専任講師
1991年　日本医科大学助教授
1992年　ドイツ連邦共和国フリードリヒ・ヴィルヘルム大学（ボン）客員研究員
2002年　東洋大学文学部哲学科教授（文学研究科博士前期課程兼担）
2006年　ドイツ連邦共和国フィリップス（マールブルク）大学交換研究員
2007年　文学研究科博士後期課程兼担

Ⅱ．学会活動

1982年　早大哲学会

1983年　日本倫理学会、日本哲学会

1986年　ゲーテ自然科学の集い

1989年　日本医学哲学倫理学会、自然哲学研究会

1992年　日本シェリング協会、日本ゲーテ協会

1995年　日本ヘルダー学会

1997年　東北哲学会

Ⅲ．学　位

1981年　早稲田大学にて文学修士

Ⅳ．業　績

⑴著　書

1．（共編）『物象化と近代主体』創風社、一九九一年

2．（共編）『ドイツ観念論と自然哲学』一九九四年

3．（共著）『自然とその根源力』西川富雄編、ミネルヴァ書房、一九九三年

4．（共編）『シェリング読本』法政大学出版局、一九九四年

5. （共編）『現代認識とヘーゲル＝マルクス――認識主義の没落と存在主義の復興』青木書店、一九九五年
6. （共著）『ヘーゲル哲学への新視角』加藤尚武編、創文社、一九九九年
7. （共編）『シェリング自然哲学とその周辺』梓出版社、二〇〇〇年
8. （共著）『ヘーゲルを学ぶ人のために』加藤尚武編、世界思想社、二〇〇一年
9. （共編）『生殖医学と生命倫理』太陽出版、二〇〇一年
10. （共編）『臓器移植と生命倫理』太陽出版、二〇〇三年
11. （共著）『東洋大学哲学講座――哲学を使いこなす』知泉書館、二〇〇四年
12. （共著）『ドイツ観念論を学ぶ人のために』大橋良介編、世界思想社、二〇〇六年
13. （共著）『環境倫理の新展開』ナカニシヤ書店、二〇〇七年
14. （共編）『看護学生のための医療倫理』丸善出版、二〇一二年

(2) 事典項目執筆

1. （分担執筆）『ヘーゲル事典』加藤尚武他編、弘文堂、一九九二年、縮刷版
2. （分担執筆）『岩波哲学・思想事典』加藤尚武・廣松渉他編集、岩波書店、一九九八年
3. （共編）『生命倫理のキーワード』理想社、一九九六年
4. （分担執筆）『哲学の木』河本英夫・永井均他編、講談社、二〇〇二年
5. （分担執筆）『生命倫理事典』近藤均他編、太陽出版、二〇〇二年、増補版二〇一〇年
6. （分担執筆）『応用倫理学事典』加藤尚武編集代表、丸善出版

7. （分担執筆）『哲学中辞典』知泉書館、二〇一六年一一月

(3) 翻訳書

1. （共訳）『シェリング哲学入門』H. M. バウムガルトナー編、北村実監訳、早稲田大学出版部、一九九七年
2. （共訳）『有限な理性』H. M. バウムガルトナー著、晃洋書房、一九九七年
3. （監訳）『われわれは「自然」をどう考えてきたか』ゲルノート・ベーメ編、どうぶつ社、一九九八年
4. （共訳）『初期ヘーゲル哲学の軌跡――断片・講義・書評』寄川条路編訳、ナカニシヤ出版（担当部分「ラインホルトのシェリング『超越論的観念論の体系』についての書評」）、二〇〇六年
5. （共訳）『超越論哲学の次元――1780―1810年』シュテフェン・ディーチュ著作、知泉書館（分担部分：前書き、序論から第六章まで、および、第一〇，一一章、解説、訳注及び索引）、二〇一四年
6. （共訳）『ドイツ医療倫理学の最前線――人格の生と人間の死』ミヒャエル・クヴァンテ著、リベルタス出版（分担部分：第三章を担当、五五―一〇七ページ）二〇一五年

(4) 論　文

1. 「初期ヘーゲルにおける『生』の意味――主体性と社会性とのアポリア」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊　哲学・史学編』一〇集、一九八三年
2. 「初期ヘーゲルにおける『国民宗教』と『古代共和国』の理想」『倫理学年報』三四号、一九八五年
3. 「シェリングにおける「実在論」の可能性の問題――『書簡』論文をめぐるフィヒテとシェリング」『哲学世界』

九号、一九八六年
4. 「自然と歴史――シェリング自然哲学の歴史哲学的機能」『社会思想史研究』一一号、一九八七年
5. 「シェリングの『ポテンツ』論――『ポテンツ論』と弁証法」『日本医科大学基礎科学紀要』九号、一九八八年
6. 「シェリングの『思弁的物理学雑誌』について」『自然哲学研究』一号、一九八九年
7. 「シェリングの『有機体』論――分極性と『普遍的有機体』の構想」『モルフォロギア』一一号、ナカニシヤ出版、一九八九年
8. 「ブラウン説とシェリング、ヘーゲル――シェリングとヘーゲルのブラウン説に対する評価と相違について」『日本医科大学基礎科学紀要』一〇号、一九八九年
9. 「シェリング『生命』論と医学――アルプレヒト・フォン・ハラーとアンドレアス・レシュラウプ」『医学哲学医学倫理』八号、一九九〇年
10. 「近代的自我と絶対者――フィヒテとシェリング、あるいはシェリング自然哲学の理論的前提」(1)-1所収、一九九一年
11. 「個体性の形而上学――ヘーゲル自然哲学の根本性格(一)(二)」『日本医科大学基礎科学紀要』一一号、一二号、一九九〇年、一九九一年
12. 「シェリング自然哲学の射程――『生成』の存在論的把握と有機体の問題」『理想』六四九号、理想社、一九九二年
13. 「シェリング『全集』の現状――これまでの著作集と新しい全集の現段階」『シェリング年報』創刊号、一九九三年

14. 「ヨハン・ヴィルヘルム・リッターと『科学史』の構想――ドイツ・ロマン主義における『歴史的思惟』の問題」一九九四年、（1）-2所収
15. 「フィヒテとシェリング――『生きている自然』と思惟（知）と存在の同一性」一九九三年、（1）-3所収
16. 「実在性と無限――ヤコービ・シェリング論争」一九九四年、（1）-4所収
17. "Das Absolute und das Realitätsproblem", in: *Praxis, Vernunft, Gemeinschaft. auf der Suche nach einer anderen Vernunft*, Beltz Atheneäum, 1994
18. 「デカルトの存在主義からヘーゲルへ――知の確実性と真理」一九九五年、（1）-5所収
19. 「シェリング歴史哲学と近代の原理――カントのヘルダー批判と歴史哲学の可能性」『ヘルダー研究』二号、一九九六年
20. 「シェリングとエッシェンマイヤー――絶対者と知的直観」『理想』六五七号、理想社、一九九六年
21. 「『世界霊魂』と自然構成の原理――自然の超越論的基礎付けと『無制約者』問題」『モルフォロギア』一八号、ナカニシヤ出版、一九九六年
22. 「体系期ヘーゲルの空間・時間論――講義草稿の議論を視野に入れて」『理想』六六〇号、理想社、一九九七年
23. 「シェリング自然哲学における『無限者』の問題――シェリング自然哲学の課題と基本性格」『シェリング年報』六号、一九九八年
24. 「体系期ヘーゲルにおける自然と自然哲学の基礎付け――講義筆記録を視野に入れて」一九九九年、（1）-6所収
25. 「シェリングとガルヴァニスムス――シェリングにおける『化学』論の一断面」二〇〇〇年、（1）-7所収

26. 「エッシェンマイヤーの有機体論――カント、シェリングそしてブラウン説」『自然哲学研究』一一号、二〇〇〇年
27. "Aufklärung und Selbstbestimmung. Patient und Arzt in Japan", in: *Berliner Medizinethische Schriften*, Nr. 42. 2000
28. 「ヘーゲルの有機体論―ベルリン時代の自然哲学の基本構造―」二〇〇一年、(1)-8所収
29. 「シェリングとエッシェンマイヤー――往復書簡の中から、シェリングの思想発展におけるエッシェンマイヤーとの論争の位置」『日本医科大学基礎科学紀要』二九号、二〇〇一年
30. 「生殖医学をめぐる議論と『子どもの権利』――不妊治療における『子どもの権利』と『子ども』の過程的性格」『医療と倫理』三号、二〇〇一年
31. 「ヒトゲノム解読と個人のプライヴァシーの問題――『同意』と『提供者の権利』をめぐって」『情報倫理研究資料集Ⅲ』二〇〇一年
32. 「人間の尊厳と科学研究の自由――『個人情報』の守秘と人体実験の可能性」『理想』六六八号、理想社、二〇〇二年
33. 「生命倫理とは何か」資料集生命倫理と法編集委員会編『資料集・生命倫理と法』太陽出版、二〇〇三年
34. 「『現実的なもの』あるいは『現実性』について――後期シェリングにおける神話と自然哲学」『白山哲学』三七号、二〇〇三年
35. 「近代人格論と「公共性」の問題―所有と承認、契約論的理論構成とヘーゲル労働論の問題」『協同総研・現代理論研・研究報告書』第三部、二〇〇三年

36. 「健康概念の再検討——その社会科学的分析と『病気』観の転換」『協同総研・現代理論研・研究報告書』二〇〇三年
37. 「シェリングの自然哲学——ドイツ観念論における自然哲学の伝統」二〇〇四年、（1）–11所収
38. “Freedom of Scientific Research and Human Dignity: Japanese Discussions following War-time Human Experimentation and Implications for Today's Debates on Medical Ethics”, in: *Twentieth Century Ethics of Human Subjects Research: Historical Perspectives on Values, Practices, and Regulations*. ed. Volker Roelcke and Giovanni Maio, Stuttgart: Steiner, 2004
39. 「情報移転を伴う医療情報と情報倫理の研究」『情報技術（IT）を応用した老人リハビリテーション計画評価書に基づくアウトカムデータベースの構築の研究開発』（主任研究者・太田久彦）分担研究書、二〇〇四年
40. “Problems on Information in Medicine and Health Care and Information Ethics: The fundamental Character of Medical Information and the Problem of Data Protection”, in *Journal of Advanced Sciences*, Vol. 16, No. 3 & 4, 2005
41. 「フィヒテとシェリング——絶対知について」二〇〇五年、（1）–12所収
42. 「知的直観——カントとスピノザの交差、あるいは自然哲学の基礎」『理想』六七四号、理想社、二〇〇五年
43. 「シェリング自由論における『汎神論』の克服と『スピノザ』問題——カントからの乖離のひとつの帰結（一）」『白山哲学』四〇号、二〇〇六年
44. “Challenge from Japan and Asia”, in *Journal of Philosophy and Ethics in Health Care and Medicine*, No. 1, 2006
45. 「工学倫理あるいは科学技術倫理、JABEEとその問題点——『哲学』は今、何を問われているか」『医療と倫理』六号、二〇〇六年

46. 「『安全性』基準の現段階とガイドライン主義――『安全性』基準のグローバル化とマニュアル主義の限界」『コープしずおか「二〇二〇年に向けた宣言」報告書』、二〇〇八年
47. 「スピノザの自然観――古代的自然観と近代的自然観の交差」（1）–13所収
48. 「シェリングの自然観――不可視の精神、可視的自然」（1）–13所収
49. 「シェリング、自然哲学の可能性――「自己意識の歴史」と「経験」としての歴史」『東洋学研究』（東洋学研究所紀要）四六号、二〇〇九年
50. 「リューベックの「死の舞踏」（一）――ユーリウス・モーゼスとドイツにおける人体実験」『白山哲学』四三号、二〇〇九年
51. "Ueber „das Unvordenkliche" beim späten Schelling oder über den Anfang und die Möglichkeit der positiven Philosophie", in: *Goethe-Jahrbuch*, Nr. 51, 2009
52. 「リューベックの死の舞踏（二）――ユリウス・モーゼスの『人体実験』批判」『白山哲学』四四号、二〇一〇年
53. 「智慧と知識――「実践知」あるいは看護知について、アリストテレスとヘーゲルに即して」『生と死』（東洋英和女学院大学大学院人間科学（死生学）勉強会）一二・一三号、二〇一一年
54. 「ドイツ自然療法――その過去と現在」日本医学哲学倫理学会編『市民公開講座資料集　代替・補完医療の可能性と限界の検証』二〇一一年
55. 「『近代医学』と『自然療法』の相克――「医学の危機」論争、あるいはドイツにおける近代医学の確立への道程を背景にして」『東洋学研究』（東洋大学東洋学研究所）、二〇一二年

56. 「ヒュームとカント――『原始契約』と社会構成原理について」『白山哲学』四六号、二〇一二年
57. 「グアテマラの人体実験――第一報告書にそくして」『一五年戦争と日本の医学医療研究会会誌』一三巻二号、二〇一三年
58. 「ヴァハターとスピノザ主義――ensophをめぐって」『スピノザーナ』一四号、二〇一三年
59. 「自己肯定としての神――「同一性哲学」における絶対者の把握、そして知的直観」『白山哲学』四八号、二〇一四年
60. 「Weltalterの研究動向とマルクス・ガブリエルのシェリング研究」『国際哲学研究』（東洋大学国際哲学研究センター）別冊五号、二〇一四年
61. "Hegels Zeit-Raum-Lehre in seiner Natuephilosophie der" Enzyklopädie "(1830)", in: *Hegel in Japan. Studien zur Philosophie Hegels*, hrsg. Yoichi Kubo, Seiichi Yamaguchi und Lothar Knatz, Zürich: LIT Verlag, 2015
62. 「グローバル化時代における地域医療と医療倫理――3.11以後の時代に」『医学哲学医学倫理』三三号、二〇一五年
63. 「カントと知的直観――カント『純粋理性批判』超越論的感性論の分析から」『東洋大学大学院紀要　文学研究科』五二集、二〇一六年
64. 「フィヒテとシェリング――『知的直観』と『絶対知』」『白山哲学』五一号、二〇一七年二月（印刷中）
65. 「環境との媒介における生命――ヘーゲル自然哲学に即して」『自然・環境・人間』国際哲学研究センター編『国際哲学研究』別冊9号、二〇一七年三月（印刷中）

(5)翻訳その他

1. 「シェリング『自然哲学の哲学一般に対する関係について』」（共訳）、『ヘーゲル研究』六号、ヘーゲル研究会、一九八八年
2. 「F.W.J. シェリング『芸術哲学講義草稿』一八〇二／一八〇三年　序論及び第一部第一章」（共訳）、『日本医科大学基礎科学紀要』九号、一九八八年
3. 「シェリング『哲学的関連におけるダンテについて』」（共訳）、『ヘーゲル研究』九号、ヘーゲル研究会、一九八九年
4. 「イェーナ学芸新聞におけるシェリング自然哲学への書評（一七九九年一〇月四日付）」（共訳）、『自然哲学研究』一号、一九八九年
5. （分担執筆）『現代哲学概論』岩崎允胤、鯵坂真編、青木書店、一九九〇年
6. 「シェリング『哲学一般の形式の可能性について』」（共訳）、『日本医科大学基礎科学紀要』一〇号、一九八九年
7. 「日本語で読めるシェリング文献」『講座ドイツ観念論第四巻　自由と自然の深淵』廣松渉、加藤尚武、坂部恵編、弘文堂、一九九〇年
8. 「シェリング『自然法の新演繹』」（共訳）、『日本医科大学基礎科学紀要』一一号、一九九〇年
9. 「自然哲学研究会―最近の自然哲学研究と自然哲学研究会」『理想』六四八号、理想社、一九九二年
10. （分担執筆）『人間とは何か―西洋近代・現代の人間論』、谷口龍男、富永厚編著、北樹出版、一九九二年
11. （分担訳）ロイス・R. メリーナ『子どもを迎える人の本――養親のための手引き』伊坂青司、岩崎暁男監訳、

どうぶつ社、一九九二年

12. 「シェリング研究文献目録」（共編）、『シェリング年報』創刊号、一九九三年

13. （短評）“W. Pauli: Writings on Physics and Philosophy”『日本物理学会誌』五〇巻九号、一九九五年

14. ドイツ疫学研究学会および諸州データ保護委任会議科学研究集団「疫学研究と個人情報保護（Epidemiologie und Datenschutz）」『医療と倫理』五号、二〇〇五年

15. “Heilpraktikergesetz, 1939” 日本医学哲学倫理学会編『市民公開講座資料集　代替・補完医療の可能性と限界の検証』二〇一一年

16. 「養子縁組のあっせんと代理母禁止についての法律」『医療と倫理』一一号、二〇一七年三月（印刷中）

二〇一六年度（平成二八年度）哲学科彙報

一　哲学科の活動（二〇一六年四月～二〇一七年三月）

・第一部哲学科長に相楽勉教授、大学院哲学専攻長に河本英夫教授が就任した。（四月）
・哲学科准教授に稲垣諭氏、哲学科助教に坂本邦暢氏が就任した。（四月）
・哲学科教育補助員（ＴＡ）に博士後期課程在学中の増田隼人氏、寅野遼氏、石井亮治氏、藤坂大佑氏の四名が就任した。（四月）
・哲学科四年生の卒業論文正式題目が決定した。（五月）
・哲学科三年生を対象とした卒論ガイダンスを実施した。（七月）
・哲学科教育補助員（ＴＡ）の増田隼人氏が退任し、後任として小笠原香乃氏、田島有里氏が就任した。（一〇月）
・第二六回白山哲学会を一〇月二九日（土）、六号館６２０９教室で開催した。また、併せて大会内で長島隆教授の最終講義を実施した。
・哲学科三年生の卒業論文仮題目届を集計、担当教員を決定した。（一一月）
・平成二八年度の哲学科卒業論文の提出。（一二月）
・平成二八年度の大学院哲学専攻修士論文の提出。（一月）
・卒業論文及び修士論文の口頭審査。修士論文は大学院で指導を担当している教員（河本、相楽、永井、長島、辻内）が審査に参加して行われた。成績判定が行われ、成績に応じて各賞を決定した。（一月、二月）

二　教員の活動

相楽　勉（教授）

論　文　1．「自然観の転換と美学受容―森鴎外の場合」（東洋大学国際哲学研究センター編『国際哲学研究』第六号、二〇一七年三月刊行予定）

学会発表　1．「美学受容と「自然」―森鴎外の場合―」（東洋大学国際哲学研究センター主催研究会「日本語「自然」の定着過程における諸問題――国語学・哲学・文学の観点から―」、東洋大学白山キャンパス、二〇一六年一〇月一二日）

学会活動　実存思想協会（理事）、比較思想学会（理事、評議員）

教育活動　学部：「哲学基礎概ＡＢ」「問題群演習ⅡＡＢ」「現代思想演習」「日本哲学特講」
大学院：「比較思想特論ＡＢ」、「哲学研究指導ⅡＡＢ」（博士前期課程）「哲学特殊研究ⅦＡＢ」（博士後期課程）

大学・学部管理運営活動
哲学科長、文学部予算委員

河本英夫（教授）

著　書
1. 『第三系統論』（郭連友訳、二〇一六年一二月、中央編集出版、北京）
2. 『ドラスティック・エコ』（二〇一七年一月、私家版）
3. 『現象学のパースペクティヴ』（二〇一七年三月、晃洋書房、共編著）

論　文
1. 「現代史」（永井良三他編『医と知の航海』、西村書店、二〇一六年七月、二〇四―二二三頁）
2. 「ゲーテ自然学とオートポイエーシス」（『モルフォロギア』第三八号二〇一六年一一月、二四―三六頁）
3. 「美と真」（『現代思想』、二〇一七年一月）
4. 「システム的リハビリテーション」（『「エコ・フィロソフィ」研究』第一一号別冊、二〇一七年三月刊行予定）
5. 「自然という現実性」（『国際哲学研究』別冊九号、二〇一七年三月刊行予定）
6. 「チバニアム」（『「エコ・フィロソフィ」研究』第一一号、二〇一七年三月刊行予定）
7. 「システム的介入の最近接領域」（『「エコ・フィロソフィ」研究』第一一号、二〇一七年三月刊行予定）
8. 「空の岩　大地の岩　水の岩――感触の現象学」（『白山哲学』第五一号、二〇一七年二月刊行予定）

概　論
1. 「環境―人間の組織化」（鼎談）（『「エコ・フィロソフィ」研究』第一一号別冊、二〇一七年三月刊行予定）
2. 「システム的介入の最近接領域ＰＰＴ」（『「エコ・フィロソフィ」研究』第一一号別冊、二〇一七年三月刊行予定）
3. 「未了・未決の人――長島隆先生に贈る言葉」（『白山哲学』第五一号、二〇一七年二月刊行予定）

学会活動
日本病跡学会常任理事（理事）

講　演
1. 「安吾と現代」（公開講座第五回、二〇一六年六月二四日、東洋大学白山キャンパス）
2. 「自然という現実性」（東洋大学国際哲学研究センターシンポジウム、二〇一六年九月二四日、東洋大学白山キャンパス）
3. 「システム的介入の最近接領域」（第八回人間

再生研究会、二〇一六年一二月一七日、東洋大学白山キャンパス）

4. 「天命反転AからZのその向こう」（二〇一七年三月五日、三鷹天命反転住宅）

教育活動

学部：「現代哲学演習Ⅰ」、「哲学と科学」、「問題群演習Ⅰ」、「論理学概論AB」

大学院：「現代哲学演習ⅡAB」、「哲学特殊研究ⅠAB」

大学・学部管理運営活動

大学院哲学専攻長

中里　巧（教授）

論　文

1. 「北欧北方の霊性とシャーマニズム」（『白山哲学』第五一号、二〇一七年二月刊行予定）

2. 「東方正教会における余白の思想―イコンや悪魔祓いをめぐる実存的思索の構造―」（『東洋学研究』第五四号、東洋学研究所刊、二〇一七年三月刊行予定）

3. 「現代的知性の再検討と希求される霊性―講演要旨―」（『天地―金光教報―』金光教本部教庁、二〇一六年九月、一五―一八頁）

4. 「現代的知性の再検討―講演報告―」（『金光新聞』金光財団金光教徒社事業部、二〇一六月八月七日、第一一五一号、第六面）

学会発表

1. 「「自己生成」概念の精神史―キェルケゴール思想の固有性―」（キェルケゴール協会大会第一七回口頭発表、東洋大学白山キャンパス、二〇一六年七月三日）

2. 「キリスト教正教イコンにおける実存的思索の構造」（日本宗教学会第七五回大会口頭発表、早稲田大学、二〇一六年九月一〇日）

学会活動

役員：キェルケゴール協会理事（理事）兼事務局長（幹事長）・日本宗教学会（評議委員）・日本臨床死生学会（理事）・北欧精神史研究会（代表）

事務局：キェルケゴール協会事務局（東洋大学白山校舎中里個人研究室）

講　演

1. 「現代的知性の再検討と希求される霊性」（金光教学研究所第55回教学研究会口頭発表、金光教本部、金光北ウィングやつなみホール、二〇一六年六月一八日）

教育活動

大学院：「哲学特殊研究ⅡAB」（博士後期課程）

長島　隆（教授）

論　文

1. 「フィヒテとシェリング―『知的直観』と絶対知」（『白山哲学』第五一号、二〇一七年二

月刊行予定）

2. 「環境との媒介における生命―ヘーゲル自然哲学に即して」（東洋大学国際哲学研究センター編『国際哲学研究』別冊九号、二〇一七年三月刊行予定）

3. 「遠隔医療の現在」（『医療と倫理』第一〇号、関東医学哲学・倫理学会、二〇一七年三月）

翻訳

1. 「代理母禁止と養子縁組あっせんに関する法律」（『医療と倫理』第一〇号、関東医学哲学・倫理学会、二〇一七年三月）

学会発表

1. 「環境との媒介における生命」（東洋大学国際哲学研究センター、東洋大学哲学科共催シンポジウム「自然、人間、環境」、二〇一六年九月二五日）

2. 「フィヒテとシェリング―『知的直観』と絶対知」（第二六回白山哲学会、二〇一六年一〇月二九日）

3. 「鴎外記念館―津和野、文京そしてベルリン」（東洋大学東洋学研究所研究所プロジェクト「日本、モンゴル、インド、中国における共生的精神文化の諸相」研究発表会、）

学会活動

医学哲学倫理学会評議員、日本哲学会編集委員会委員、日本ゲーテ協会「ゲーテ賞」選考委員

教育活動

学部：「ドイツ語IIA①」、「ドイツ語IIA④」、「西洋哲学史概説IIAB」、「近世哲学演習I」

大学院：「近世哲学研究AB」（博士前期過程）「哲学特殊研究IIIAB」（博士後期課程）

大学・学部管理運営活動

東洋学研究所運営委員、全学図書館運営委員および白山図書館運営委員（大学院文学研究科推薦）、哲学科および哲学専攻選書委員

永井　晋（教授）

論文

1. 「象徴の哲学――生命の論理としてのカバラー」（『シェリング年報』第二四号、こぶし書房、二〇一六年七月二日、三〇頁～四〇頁）

2. Phénoménologie, métaphysique, philosophie comparée-Esquisse d'une phénoménologie positive-, "Phenomenology and Japanese Philosophy", Springer（二〇一七年三月刊行予定、頁数未定）

学会活動

日本現象学会（理事）、比較思想学会（理事）

講演

1. 「形而上学としての比較哲学」（比較思想学会第四三回大会、関西大学、二〇一六年六月一九日）

2.「近代日本の哲学思想における伝統と近代」(イラン、タバタバーイー大学、二〇一七年三月予定)

教育活動

学部:「宗教学ⅠAB」、「地域文化研究ⅢAB」、「現代哲学特講Ⅰ」、「現代哲学演習Ⅱ」、「哲学演習Ⅱ(仏)」

大学院:「現代哲学演習ⅠAB」、「哲学研究指導ⅢAB」(博士前期過程)、「哲学特殊研究AB」、「哲学研究指導ⅥAB」(博士後期課程)

大学・学部管理運営活動

文学部グローバル化推進委員会委員長、キャリア形成委員会委員

辻内宣博(准教授)

書評

1.(新刊紹介)Kuni SAKAMOTO. (2016) Julius Caesar Scaliger, Renaissance Reformer of Aristoteliamosm: A Study of His Exotericae Exercitationes, Brill.(『西洋中世研究』第八号、二〇一六年、二八六—二八七頁)

学会活動

中世哲学会(事務局幹事、情報システム委員)

西洋中世学会(事務局委員)

教育活動

学部:「西洋哲学史概説ⅠAB」、「問題群演習Ⅲ」、「哲学概論」、「古代哲学特講」、「中世近世哲学演習」

大学院:「古代中世哲学研究AB」(博士前期課程)

大学・学部管理運営活動

教職課程運営委員会委員、カリキュラム検討委員会委員、入試委員会委員、文学部ホームページ担当委員

稲垣 諭(准教授)

著書

1.『医と知の航海』(西村書店、二〇一六年七月、三八~六〇頁、項目「哲学」)

2.『現象学のパースペクティヴ』(二〇一七年三月、晃洋書房、共編著、「臨床と影—操作と変容する主体の現象学」を寄稿)

論文

1.「ワークショップ 現象学の可能性を再考する—実践的学科との結びつきを中心に」(『現象学年報』三二号、日本現象学会編、二〇一六年一一月)

2.「最近接領域の現象学」(『臨床心理学』、日本臨床心理学会編、金剛出版、二〇一七年三月刊行予定)

3.「個はいかに立ち上がるのか」(『エコ・フィロソフィ」研究』第一一号、二〇一七年三月

刊行予定）

学会発表　1.「健康と持続可能性」（一般社団法人サステイナビリティ・サイエンス・コンソーシアム（SSC）、東洋大学国際哲学研究センター「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ共催研究集会、東洋大学白山キャンパス、二〇一六年六月三日）

2.「治療の最近接領域」（第八回人間再生研究会、東洋大学白山キャンパス、二〇一六年一二月一七日）

講　演　1.「美のさまざまなかたち」（ワコール主催 images of Beauty—さまざまな美しさのかたち—、表参道スパイラル、二〇一六年一二月四日）

2.「未来のデザインへの糸口、デザイン理論から」、（「デザインの理念と形成：デザイン学の50年」第二回　トークセッション、ミッドタウンデザインハブ、二〇一六年一二月一〇日）

教育活動　学部：「哲学AB」、「哲学史AB」、「ロジカルシンキング入門」（1部・2部）、「クリティカルシンキング入門」（1部・2部）、「哲学演習」、「現代哲学演習ⅠAB」」

大学・学部管理運営活動　自己点検評価委員

坂本邦暢（助教）

著　書　1. *Julius Caesar Scaliger, Renaissance Reformer of Aristoteliaism: A Study of His* Exotericae Exercitationes. Leiden: Brill, 2016. pp. viii+213.

2.『現象学のパースペクティヴ』（二〇一七年三月、晃洋書房、共著、「デカルトを読むフッサール：コギト、場所、時間」を寄稿）

翻　訳　1.『リヴァイアサンと空気ポンプ：ホッブズ、ボイル、実験的生活』（スティーヴン・シェイピン、サイモン・シャッファー著、吉本秀之監訳、柴田和宏、坂本邦暢訳、名古屋大学出版会、二〇一六年五月、vii＋三三七＋一〇六頁）

論　文　1.「愛は世界を動かす：前近代宇宙論における神、知性、天球」（『史苑』七六巻、二〇一六年四月、一六五—一八二頁）

2.「形相の庇護者：ユリウス・カエサル・スカリゲルと知性の問題」（『白山哲学』第五一号、二〇一七年二月刊行予定）

書　評　1. Yuichi Akae, *A Mendicant Sermon Collection*

from Composition to Reception: The Novum opus dominicale of John Waldeby, OESA」『西洋中世研究』六巻、二〇一六年十二月、二四三―二四四頁）

学会発表

1. 「政治と真空:『リヴァイアサンと空気ポンプ』から三十年」（ルネサンス研究会、学習院女子大学、二〇一六年七月二日）

2. "The Agent Intellect and Divine *mens* in Julius Caesar Scaliger and Jacob Schegk," Sixteenth Century Society & Conference, Bruges, 2016.8.19.

3. 「デカルトに知られざる神：新哲学とアレオパゴス説教」（第二六回白山哲学会、二〇一六年一〇月二九日）

その他の活動

1. 東洋大学国際哲学研究センター主催ワークショップ「哲学・ショック―愛智の営みは何を受け取らせたのか―」（東洋大学白山キャンパス、二〇一六年十月八日）、企画、参加、司会

2. 上智大学中世思想研究所主催／神学・哲学史研究会共催講演会「中世における平和の諸相」（上智大学四谷キャンパス、二〇一六年十一月二〇日）コメンテーター

3. 「西洋中世の見／魅せ方―高校の勉強から大学の学問へ―」（東洋大学国際哲学研究センターワークショップ、東洋大学白山キャンパス、二〇一六年十二月一七日）企画、参加

学会活動

日本科学史学会（常任委員、和文誌編集委員）、西洋中世学会（『西洋中世研究』編集委員）

教育活動

学部：「哲学AB」「哲学AB」「哲学史AB」「哲学演習IAB」

学外：「科学史」（日本大学経済学部）

三　二〇一六年度哲学科卒業論文題目一覧

仮面について　高尾泰平

一般社会における発達障害と発達の最近接領域の関係について　熊谷俊典

音楽業界と媒体の変容と、楽曲制作から見る音楽
―歴史における音楽の広まりと現代音楽の諸問題、その未来　岩崎孝将

ゲーテ色彩論から見る世界　河野佳祐

ニーチェのニヒリズムについて―精神の三つの変化　小舘龍一

芥川龍之介―「河童」に見られる芥川の世界観　関口有希

感情と現象学—感情の多様性と自傷行為についての　竹下康平
現象学的還元的考察　菅原真琴
日々のこと
教育によって子どもは有徳な人になれるか
—プラトンとアリストテレスをもとにして　丸山瑞穂
孤独死とハイデガーの現象学的存在論　近藤峻吾
スポーツと哲学　篠田喜代人
動物を食べることについて　須田玲菜
ラッセルの『幸福論』の不幸の原因は不幸の本質を
捉えているか　高城圭佑
良心や道徳の根拠に宗教は必要か　高樋あずさ
音楽—四季の歌　竹添結
死の自己決定権—ベルギーの女性をケーススタディとして
寺本遥
読書とは何か—ミヒャエル・エンデの『はてしない物語』を
参考にした物語の経験の意味付け　中村正恵
ハイデガーの芸術論　益本衛
死の消費—死生観と漫画　山田歩実
「笑い」と「人」の結びつき—現代において「笑い」とは
我田隼介
音楽と心　野村誠
生きる意味　岩間仁美
私たちは常に価値判断をもつべきであるのか　遠藤知里
絶対音感について　及川善映子
神道論—妖怪、幽霊の視点から　荻原沙季
書の哲学—書の世界を探る　柏木都萌美
意識のクラウド化—水面下で常に稼動している意識
後藤知世
脳死は人の尊厳を奪うのか　柴田玲奈
現代社会における正義と悪　島田菜々帆
映像演出と立体演出について—プロジェクションマッピング
から見る立体と映像の融合効果　田崎瑞奈
スポーツと哲学　富樫汰一
法による罰と幸福感情は関係があるのか　松村芽依
自己と他者　米山奈都
科学の客観視についての二つのアプローチ
—科学発見と発展の主観性の線引き問題
韓雨暘
贋作について　稲浦翼
たのしい性教育—性交の教育について　坂本裕允
「個」を見つめる—小津安二郎作品より　西丸早紀
歴史詩学考検—ヘイドン・ホワイト
『メタヒストリー』について　渡邉和教
新宗教について—とりわけその胡散臭さについて
浅野瑠璃
レヴィナスの倫理学—顔に対する責任　今岡裕貴
倫理と合理性　太田知秀

人間観について　大竹清仁
死―現代人の死生観　前田明穂
「笑い」について―お笑い芸人に求められることとは　正木敏朗
ヘーゲルと神の存在論的証明―直接知と媒介知の統一という観点から　八尾柚希也
確率の主観説と科学的推論　大滝陽心
道徳化する空間―伊藤計劃『ハーモニー』のカント的解釈　工藤翔太
フィクション―Crying Deep Blue　越合航平
デカダンス―破壊による美しさ　清水彩子
充実する生の時間論　高柳奈奈
消費者心理―小売業における「物」から「モノ」へ　若林健一
マイノリティとマジョリティ―フーコーと愛の行方　川島結花
個と世界の「間」　舟久保拓哉
踏切宇宙人　鈴木美和
類人猿に人権はあるか　藤本彩未
現代日本における死生観　渡邊清人
芸術作品の意味について―ルネ・マグレットの絵画作品と商業デザイン　石田真菜
翻訳は可能か―クワインから考察する　岡田有紀
夢分析について　金子由佳
物語をつくるということ　川良美野里
ジョン・マーティン研究―その生涯と絵画の対象の推移　關瑞穂
トマス・アクィナスにおける世界の永遠性の証明不可能性について　石橋周都
死の準備教育―死を見つめ、生をみつめなおす　兼坂美玖
ゲーム理論について　川島匡生
エウダイモニアは徳倫理学において指針となるか　千葉晴日
サブカルチャーを哲学する―アーバンギャルドという世界からみたサブカルチャー　二階堂真子
恋愛論―結婚・出産における社会問題から読み解く若者の恋愛離れについての考察　廣畑瑛美
ケルト美術からのまなざし―ケルト美術と神話からみる思想　峯岸祐季
日本における仏教思想の変遷―儒教と融合した仏教　岡本真乗
心は科学的に記述可能か　井村友哉
ミシェル・フーコーと現代社会―人は社会の中で、自由になれるのか　阪後理生

〝愛する〟とはどういうことか—現代の若者が大切なパートナーを傷つけてしまわないために　藤野勇介
言語ゲーム論考　飯島章伍
スーザン・ソンタグの世界観が訴えかけるもの　秦泉寺美波
裁きの神から赦しの神へ　辻祐香
日本とキリスト教—日本でのキリスト教信仰を「隠れキリシタン」を通して考える　永田千枝子
コンテンポラリーダンスにおける身体と心　宮澤瑠璃
実存と不安—サルトルとノワール文学　武藤裕也
子どもと悪　森綾香
占星術について—西洋占星術の解釈を拡げる「もう一つの出生図」の存在　渡辺咲枝子
人間の意志決定について　井戸実咲
世界の宗教—歴史・文化比較と現在の日本　小俣皓平
自己同一性に対する解釈—漫画作品『己を探すもの』　数田真実
言語コミュニケーション—伝達される内容は相手に正確に伝わるのか？　黒木亮
免疫学的に見る人間　渡邊優輝
音楽について—ショパンのノクターン　川久保沙耶
人類と時間　小松秀平
奇劇か非劇　小見山春代
クラシック音楽とシュルレアリスム—音楽に存在したシュルレアリスムの動き　高橋悠
創造的忘却　眞木郁栄
日本文化の美—茶道　生みだされる美　赤羽由梨
エンハンスメントは倫理的に正当化されるか　高橋幸佑
アンデルセン研究—童話『人魚姫』における愛　中谷莉奈
言葉と動き—「動きの言語化」によるコツの習得　藤代真綾
美術館と現代アート　近藤南美
行為と判断　坂下喜彬
こころの病気について—社会不安障害と対人恐怖　松村慶太郎
サンデルの政治哲学—共通善の意義とそれに基づく政治について　鷲尾大樹
ジョン・ロールズの正義の原理的な在り方は正当化されるのか　小形卓也
応報刑からの可塑性　鈴木一平
責任訴追論　大場康平
「間」について　宮澤舞

四　二〇一六年度修士論文題目一覧

日常性と創造性の哲学　赤間裕太

認知と行為の現象学
―リハビリテーションの臨床例をもとにして―　月成亮輔

五　二〇一六年度開催　東洋大学白山哲学会

日時　平成二八年　一〇月二四日　一三時半から

会場　六号館二階　６２０９教室

研究発表

司会：辻内宣博

坂本邦暢氏（東洋大学文学部哲学科助教）

「デカルトに知られざる神　新哲学とアレオパゴス説教」

長島隆先生最終講義

司会：永井晋

長島隆氏（東洋大学文学部教授）

「フィヒテとシェリング―知的直観と絶対知―」

懇親会

八号館一階、TRES DINING

その他

校友会研究奨励賞に博士前期課程の月成亮輔氏、学部四年生の八尾柚希也氏、文学部歓学奨励基金に学部四年生の大滝陽心氏が選出された。

執筆者紹介

長島　隆　文学部教授（哲学）
中里　巧　文学部教授（哲学）
河本英夫　文学部教授（哲学）
稲垣　諭　文学部准教授（哲学）
坂本邦暢　文学部助教（哲学）

白山哲学第51号

東洋大学文学部紀要第70集哲学科編
2017年２月28日発行　　（非売品）

編集兼　東京都文京区白山５丁目28の20
発行者　東洋大学文学部哲学研究室
電話　０３（３９４５）７３５３